「十字架とバラバ」

マルコによる福音書１５章６－１５節

森島 牧人 牧師

父は牧師でありましたのでその本棚は神学書で埋め尽くされていましたが、その中に一冊、スウェーデンの作家による文学作品「バラバ」がありました。それは、主イエスの十字架の死と引き換えに死刑を免れることになった一人の粗暴な男・バラバの魂の遍歴が描かれた重要なテーマの作品でした。今日の聖書にはそのバラバが登場します。

さて、先回も読みましたが、最高法院からローマへの反逆者として引き渡されて来た主イエスを見たピラトが最初に言ったのが「お前がユダヤ人の王なのか」でした。ギリシャ語聖書では＜お前＞が大文字で強調されていますが、その時ピラトの前に立っていたのは、打たれ痛めつけられて傷だらけになった体にぼろぼろの衣をまとった一人の男でした。その姿を見たピラトは「一体お前がユダヤ人の王だというのか。そんなはずは無かろう。」との思いで男に尋問したのです。「そうではない」との答えを予想したピラトでしたが、男の答えは「あなたがそう言うのならそのとおりだ」というものでした。この主イエスの答えは「わたしは、ユダヤ人だけではなく全人類の王として、すべての人間を救うためにここに立っている。」という意味でした。。（マルコ１５：１，２）

主イエスの真意を理解出来ないピラトでしたが、この告発がユダヤの指導者らの妬みによるもので男に罪がないと判断した彼は男を釈放しようと考え、祭りの日の恩赦という慣習を利用し、一人の暴徒を対抗馬とする作戦を思い付きます。この暴徒がバラバ・イエスです。この主と同じ名前の＜イエス＞はヘブライ語では＜ヨシュア＞で長男によくある名前でした。またアラム語のニックネーム＜バラバ＞には立派な「父の子」という意味があり、この渾名からしますとバラバの父は優れた宗教指導者だったと思われます。バラバ自身も民族主義者として人気があったのかも知れません。（同１５：６ー１０）

自分の秘策に満足しながらピラトは群衆に「バラバ・イエスとキリストといわれるイエスのどちらを釈放して欲しいか」と問います。ところが彼の予想に反して群衆の答えは「バラバを」というものでした。困惑したピラトが「ユダヤの王という男はどうするのか」と重ねて問うと、群衆は「十字架に付けろ」と叫び立てたのです。祭司らにそそのかされた群衆が選んだ主イエスへの刑、それはローマへの反逆者にのみ適用される最も残酷な刑・磔刑でした。今はユーチューブで簡単に聞くことが出来る、バッハの「マタイ受難曲」は見事にこの場面を再現しています。ピラトは最高権力者でありながら右往左往してしまい、結果、その裁判での審理のイニシアティブを群衆に奪われてしまいました。ですから判決を下したのは群衆だったのです。（同１５：１１－１５）

世々の教会が信仰告白として繰り返し唱えて来た使徒信条の中に「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け・・・」という言葉があります。その時たまたまローマの総督であったがために、二千年もの間主イエスを十字架にかけた人物として非難され続けて来たのはちょっと気の毒な気もしますが、しかし私たちはこの出来事の中で彼が単に歴史上の人物としてではなく、人間の弱さ、権威の愚かさ、人間の優柔不断さを代表する人物として、実名でもって登場しているのであることに気付かなくてはなりません。つまり彼の過ちは他人事ではなく、私たち自身の過ちなのです。従って私たちは使徒信条の中で、私たち人間の弱さや愚かさの象徴としてポンテオ・ピラトを受け止めなければならないのです。

苛立つピラトに対して、全く動かず、何も言われない主イエス。ピラトが不思議に思ったその沈黙はイザヤ書５３章７節の「　彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように」との預言の言葉そのものです。しかし主イエスの王としての姿はなぜ屠り場に引かれる小羊であらねばならなかったのか。同じ５３章５節に「彼が刺し貫かれたのは　わたしたちの背きのためであり　彼が打ち砕かれたのは　わたしの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって　わたしたちに平和が与えられ　彼の受けた傷によって　わたしたちはいやされた。」とあります。「神と私たちの間に平和を回復し、私たちを死に至る病から癒すために小羊なる主イエスは屠り場に引かれて行き、十字架の上で刺し貫かれた。この小羊なる主イエスの出来事、贖いによって私たちは滅びの死から救い出された」とイザヤ書は語っているのです。

沈黙のまま十字架を引き受けたられた主イエスの愛、私たちの思いをはるかに超えた限りなく大きなその愛、その愛の前に私たちはただただ感謝する外ないと思うのです。

（説教要約　羽入田悦子）